
前後不覚

天ヶ森雀

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

前後不覚

【Nコード】

N34710

【作者名】

天ヶ森雀

【あらすじ】

失恋した三十路男と、その後輩の酔っ払いグダグダ話。ひたすら軽く、コメディです。

TIINAMIより転載作品。

失恋

「うわぁ、俺はもう終わりだっつ！」

「ハイハイ、さあ飲んで」

居酒屋のカウンターに突っ伏す俺を、後輩の一真は軽くいなして焼酎を注いだ。氷が多めで水は少なめ。長い付き合いだけあって、バランスはばっちりだった。

「あ、あとボンジリとレバ串と肉じゃがね」

「あいよ！」

カウンターごしに塩辛い頭の親父が威勢良く答える。

「大体、総務の女子なんて、我々には高嶺の花だって分かってたじゃないですか」

一真の言葉は的確で容赦ない。

「それでも可愛かったんだよう。柳原さくん…」

分かってる。三十路男の失話恋なんか、誰だって聞きたくないだろう。けれど、1年越しの恋だったのだ。

「長い髪とか、小さくて柔らかかそうな身体とか、うすくピンクのマニキュアを塗った爪とか！」

「ああ、彼女ナチュラル系でしたもんねえ」

一真はうんうんと相槌を打つ。

「内線もすごく優しいしやべり方で」古市さん、請求書の提出お願いします』ってなあ…」

思い出すとまた涙がこみあげてきた。

「ハイハイ、いいから飲んで忘れましょう。ね？」

「忘れられない」

「ったく…、おっちゃん、生中追加！」

「へい！」

「一真あ、やつぱ設備なんて裏方はダメなのかなあ…」

「まあ、地味ですしねえ。そもそも、我々の仕事なんて誰も把握し

てないでしょう」

ばっさり切り捨てられて、俺はひたすら頂垂れるしかなかった。

俺や一真が勤める商業ビルの設備部は、主な仕事が熱源管理やその運営となっている。普段は三階の隅にある中央監視室でガスや空調、電気、水質等のモニタリングをしているが、地下のボイラー室やコージェネなんて、一般社員はどんなものか、と言うよりその存在さえ知らないだろう。制服だって地味な作業着系。他の社員の目に着くのは、せいぜい照明灯の交換くらいだ。

「不況のあおりで我々はどんどん営繕部と化してますしねえ」

一真は肉じゃがをつつきながら、苦笑した。

以前は大抵業者に修理を依頼していたものが、会社の予算の関係で「できるものは自分達で」と修理が回ってくる様になったのだ。

おかげでプールの排水詰まりから外周の植木の剪定、宴会が壊したテーブルの溶接まで面倒見ている次第。おかげで溶接やら養生やらやたら上達してしまった。まあ、それは別に良いのだが。

「一真あ、俺ってダメな男かな。いいとこ全然ないのかなあ」

「そんな事ないですよ。ボイラーブローとか丁寧で的確だし、冷水と冷温水のヘッダーバランスも絶妙！」

「そんなの、専門過ぎて一般女子のアピールにならねえだろうが！」

「じゃあ…背が高いから九尺の脚立でも音楽ホールの管球交換ができるとか…」

「背だけかよ！」

ちなみに脚立は尺で数える。一段1尺（約33センチ）だから、九尺だと2.7メートルと言ったところだ。とは言え、脚立は一番上には乗るのは禁止だから、俺の身長＆手の長さを合わせて約4メートルまでは悠々届く計算。…本当にどうでもいいな。

「どう言って欲しいんですか！」

「俺が幸せになれるって言ってくれよ」

一真は呆れて溜め息をつく。けれど、子供をあやすように言ってくれた。

「古市先輩はいい男です。きっと幸せになれますよ」

「…本当に？」

上目遣いで聞き返す。

「本当です」

「本当に本当？」

「ええい、くどいわ！」

後ろから背中をどつかれた。

一真が入れてくれた耐ハイを啜りながら、柳原さんに思いを馳せる。今、俺の隣にいるのが彼女ならいいのに。長い髪を揺らして笑ってくれてたら幸せなのに。いるのはでかくて眼鏡をかけて短い髪の一真だけ。

なあんで、こいつに聞かれたら畳まれそんな事を考えてたら、変なものが目に入った。

「…れ？ お前、ピアスなんかしてたっけ」

「…たまに。仕事中は外してますが」

薄い耳朶に小さく光る石が左右ひとつずつ。ピアスなんて今時珍しくもないが、こいつがそんな小洒落たもんつけてるとは思わなくて驚いた。えーと、俺より五つ下だから、今26だっけ？

「へ〜〜〜」

「……………」

「ほ〜〜〜」

「……………」

「ふ〜ん」

「何ですか！」

「ちくしょう、パリっとしたかつこしやがって！」

「別にいいじゃないですか」

「あのなあ、比較物件が良ければ俺の評価は下がるんだよ。お前、結構ほかの部署の女の子とも喋ってるだろう」

「それは…」

「それは何だよ!？」

「うちは厳ついおっさんばっかで話しかけにくいつて言うから…」

それは本当だ。親方の五十になる課長を始め、総勢八名、全体的にこつい。固着したバルブの開閉や薬液の運搬など、必然的に力仕事は免れないから仕方ないのである。その中であつて、一真は比較的細いし若い。その一真さえ、軟水器用の塩袋30キロを、一人で持ち上げたりするのだが。女子が話しかけやすいのも分からなくはない。俺だつて若手の部類に入るんだけどな!。

「ちくしょう、こざつぱりした格好しやがつて」

完全に八つ当たりだった。後輩の癖に先輩よりもてるとは生意気じゃないか。

「悔しければ古市先輩も制服にアイロンかければいいじゃないでしょう!」

制服にアイロンなんかかけてたのか、こいつ。同じ制服でも印象がちがう訳だ。

「馬鹿野郎! 汚れるのが当然の裏方に、アイロンなんて必要あるか!」

「ハイハイ。いいから飲んで下さい」

酔っぱらい相手に付き合つてられないと言つた風情で、一真は片手をヒラヒラふる。

「一真あ」

「何ですか?」

「慰める!」

「慰めてるじゃないですか」

「ちくしょー…」

「はいはい。古市先輩はイイ男ですよ」

「もっかい言つて」

「…おっちゃん、生中追加!」

「一真あ…」

泣きの入った俺を横目に、一真は黙々と白和えをつついている。
それがその晩の最後の記憶で、あとはよく覚えていない。

……………
答だった。

不覚（前書き）

やや下品。

不覚

目覚めたら、全然知らない部屋だった。

どこだ、ここ？

起き上がろうとしたら激しい頭痛に襲われる。

「ぐはっ！」

「ダメですよ、急に起き上がっちゃ。昨日何杯飲んだと思ってるんですか」

呆れた声の上から降ってくる。

「…一真…？」

「はい、お水」

白いＴシャツを着て、何故か眼鏡を外している一真が、ペットボトルを差し出した。

「お…」

そおつと起き上がったら、肌掛けが捲れて、何も着てない身体があらわになった。

…え？

…えーと？

……………。

…これはきつとアレだな、酔って吐くかなんかして、汚れた服を一真が脱がせてくれたりとかなんとか。…でも、ぱんつまで脱がす必要はないと思うんだが…。とりあえず、水を少し飲んで気持ち落ち着ける。出した声が必要以上に低姿勢になったのは、記憶がないから仕方ない。

「…えーと、あのですね、一真さん…？」

「やつちやいましたね」

「どわっ！ なななな何をし？」

「覚えていないんですか？」

「ちょ、ちよつと待て！ 何かの間違いだ！ 今思い出すから！
……っ！っ！」

「あーあ、急に大声なんか出すから」

「嘘だろ？ 嘘だって言ってくれよ」

「……意外と良かったですよ？」

「慰めてるのかさざりと言うのが、却って痛かった。

「意外ゆうなあ！」

「ハイハイ」

腋の下をだらだらと嫌な脂汗が流れる。

だつて一真だよ？ ヤツたつて何？ 有り得ないだろうが！

「責任取れなんて言いませんから」

「責任て！」

「……まあまあ良かったですよ？」

「まあまあゆーな！」

「大体ねえ、何でもいいから慰めろつて言ったのは古市先輩ですか
らね？」

「だからつて」

「大変だつたんですから！ ぐでんぐでんの先輩をここまで運ぶの
！」

「無理やりタクシー乗せてうちの住所言つちまえば良かったろうが」

「給料日前で金ないからつてあの居酒屋にしたのは誰ですか！」

「そうだった。思い出した」

「言つとくけど財布の中身なんかうちの部署は筒抜けですからね」

確かに俺の家はK市だから遠かった。電車で送ったら一真が帰れ
なくなる。180センチ以上のでかい男を担ぐなら、近場の自宅の
方がそりや良かったんだろう。

だがしかし。

「とにかく！ お互い大人なんですから、不慮の事故つて事で」
「……………」

「とりあえず、今日は先輩、遅番でしょ？　そろそろ用意した方が」
「あ」

枕元にあつた目覚まし時計を見たら、勤務開始まであと一時間だった。一真のアパートから会社は歩いて15分と言つてたから、シャワーを借りて着替えたらちょうど良いだろう。

「はい、アイロンかけとききましたから」

「…サンキュー、シャワー借りるわ」

ソップを向いて渡されたシャツは、きつちり皺が伸びている。嫌な気の使い方だなあ、おい。こちら目もそらしたから、期せず手が重なつて慌てて払つた。

手のひらの感触から、不意に、ゆうべの一真の低い喘ぎ声が蘇る。うわ！　嘘だろ、俺！　やや前屈みになりながら、肌掛けを身体に巻いて風呂場に向かつた。

浴室に入る直前、ふと思いついて俺は尋ねた。

「一真」

「何ですか？」

「お前：下の名前、なんだっけ？」

「コーヒーを飲もうとしていた一真が急に吹き出す。」

「チョイ待てこら。3年も一緒に仕事してて、後輩の名前も知らんのか、あんたは！！」

「だって、苗字でしか呼ばないから覚える必要なかったし！！」

「何でこんなに怒るんだよ、こいつ。」

「…響子、です」

「恐ろしく低い声が、ぶすつたれて答えた。」

「キョウコ」

無意識に口に出して呼んだら、何故か一真は真っ赤になった。

「えーと、…あれ？」

「いいから早くシャワー浴びて来い！！」

先輩に対する言葉遣いと思えぬ乱暴さで、一真は俺に向かって枕を投げつける。

慌てて俺は、浴室へと飛び込んだ。

きちつと片付いたユニットバスと、いい匂いのするボディソープ。なるほど、意識した事なかったけど、そういやこれが奴の匂いだっ
たな。

徐々に昨夜の記憶が甦りそうになって、思わず頭を振ったら、二
日酔いの頭痛でまた死にそうになった。

えーと、おれ、失恋したばかりだったよな？

一真はただの後輩で同僚だったよな？

（お互い、不慮の事故と言う事で）

奴の台詞が甦る。

それが一番だと、頭の中で説得する俺がいる。
しかし。

覚えてないぞ、俺は。

思いのほか柔らかかった肌とか、泣きそうな声とか。

ああ、覚えていないとも！

もちろん、さっきの真っ赤になったうなじだって見てないしな！

頭の中で頭痛と混乱がタップダンスを踏んでいる。

…嘘だろう？

勘弁してくれよ。

不覚を取ったとはこういう事を言うのだろうか。

（この不覚は高価く付きそうだ…）

そんなことを考えながら、俺は熱いお湯を思いっきりシャワーか
ら頭に叩きつけていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3471o/>

前後不覚

2011年4月27日14時25分発行